

九州大学総合研究 博物館ニュース

March 2009 No.12

常設展示室へようこそ:その4 九州北部の淡水魚類

中島 淳



1. カワバタモロコ、2. カゼトゲタナゴ、3. ニッポンバラタナゴ、4. スジマドジョウ(九州型)

いわゆる「淡水魚」と呼ばれているものには、一生を淡水域で暮らす純淡水魚、海と川を行き来する通し回遊魚、川の水と海の水が混ざる河口や干潟で暮らす汽水魚が含まれます。これまでに、九州北部地域ではカゼトゲタナゴ、セボシタビラ、アリアケギバチなど九州固有の種類をはじめとして、150種以上の淡水魚類の分布が確認されています。当地域の淡水魚類相は、なぜこれほど豊かなのでしょうか？

九州の北東部の河川は、古い時代に本州・四国・九州東部の河川を結んで流れていた古瀬戸内水系に所属していたと推定されています。一方、九州の北西部の河川は、古い時代に朝鮮半島や中国大陸の河川と接続していた可能性が示唆されています。実際に、北東部の河川には、ギギやイシドジョウなど本州の瀬戸内側河川との共通種が分布しており、北西部の河川には、ヒナモロコやヤマノカミなど大陸河川との共通種が分布しています。これに加えて、サケやイトヨなど日本海を北方から回遊してくる種類、カライワシやテングヨウジな

ど東シナ海を南方から回遊してくる種、クルマサヨリやシロチチブなど瀬戸内海・有明海のような大規模な内海の汽水域を好む種、というように様々な起源の魚類が九州北部の河川に生息しています。

したがって、九州北部の淡水魚類相がこれほど豊かであるのは、東西で別々の水系を通して別々の魚類が移動して住み着いたこと、日本海、東シナ海、瀬戸内海、有明海という、個性的な海域に囲まれていること、に大きな理由があるのです。さらに付け加えるならば、古くから地質が安定していることや、山系が複雑で大小様々な数多くの河川が存在し多様な環境構造を有すること、などの地史的・地形的特徴を持つことも重要な要素です。

また、九州北部地域は干潟環境も大変豊かで、アオギス、キセルハゼ、クボハゼなど国内他地域で減少している種の生息地が数多く残っています。有明海には日本固有種のアリアケヒメシラウオをはじめ、日本ではここでしかみられないアリ

アケシラウオ、エツ、ムツゴロウ、ワラスボなどの魚類も分布しています。有明海は最大の干満差が約6メートルもあり、平坦な地形とも相まって、干潮時には広大な干潟域が出現します。このような環境は国内他地域には存在しません。有明海にすむこれらの魚類は、この特殊な環境に適応して生き残ってきた、日本の財産ともいえる貴重な魚類といえます。

九州北部の淡水魚類は分類学的にも大変重要な位置を占めます。ある種を学術的に分類する際に基準となる標本を模式標本といいます。オйкаワやカマツカなど西日本で一般的によく目にする淡水魚類の模式標本の多くは、長崎県でシーボルトが収集したものが中心となっています。近年、遺伝子での解析が細かく行えるようになり、これまで同種と思われていたものが別種であったことが判明することが増えてきました。模式標本の故郷である九州北部の淡水魚類は、どの種がどの種にあたるのか、ということを実験の技術を使って科学的に調べるときに、大変重要な役割を果たすことなのでしょう。

しかし、これらの貴重な淡水魚類の生息場所は、近年の都市化に伴う河川環境の破壊や、農業用水路のコンクリート化、また干潟の干拓などの影響により失われつつあります。実際に最近の分布調査により、福岡市周辺では河川改修や沿岸域埋め立てなどの環境破壊によりカワバタモロコ、ヒナモロコ、クルマサヨリが絶滅していることが明らかになりました。さらに、オオクチバス（ブラックバス）やブルーギル、タイリクバラタナゴといった国外外来魚、ハスやゲンゴロウブナ（ハ

ラブナ）といった国内外来魚の影響も無視できない状況です。これらの外来魚類は、オオクチバスやハスのように他の在来種を捕食するという直接的な害はもちろんですが、たとえ肉食性でなくても新たに定着することで、結果的に在来種の生息場所を奪ってしまうという間接的な害があることが知られています。

九州北部地域の淡水魚類は、世界に例をみない特徴的で貴重なものです。残念ながら、福岡市周辺など一部の地域ではいくつかの淡水魚類が絶滅してしまいました。ところがまだ幸いなことに、九州北部の多くの場所では、現在の日本では考えられないほど多種多様な淡水魚類の生息環境が残っています。これらの魚たちとその生息環境を今後も保全していくためにはどのような対策が必要なのでしょう。そもそも、人間との共存は果たして可能なのでしょうか。多くの人に考えてほしいテーマです。

現在、博物館の展示室では九州北部の貴重な淡水魚類を数種、生きたまま展示しています。気をつけなければ見過ごしてしまう小魚ばかりですが、じっくりと観察すると、種類によって様々な特徴があることがわかります。ぜひ一度、足を止めて観察してみてください。すばらしい美しさですよ！

（総合研究博物館 協力研究員・工学研究院 学振PD
魚類学・河川環境学）

常設展示室へようこそ：その5 九大博物館展示室を利用したワークショップ①

三島美佐子

前号、「常設展示室へようこそ：その1」でご紹介した「九大博物館標本かるた」は、2007年度から採択されているP&P研究「九大博物館展示室を利用した実践的研究」の一環でした。そのP&P研究の取り組みの一部で、特に常設展示室を活用したワークショップについて、3回にわたってご紹介します。初回はワークショップの核となる「インクルーシブ・デザイン」についてお話し、その後、実際に行った2回のワークショップの内容についてご紹介いたします。

さて、皆さん、「インクルーシブ・デザイン」という言葉を、聞いた事がありますか？私は、一昨年ほど前、共同研究者の平井先生から、初めてこの言葉を聞きました。「インクルーシブ・デザイン」というのは、「これまで除外（ほうかん exclude）されてきた人々を包含（include）し、かつビジネスとして成り立つデザインを目指す」という考え方で、「ひとりひとりの違いに向き合いながら、多様性やデザイン性を重んじる」ものです。（もしウェブサイトを見る事ができれば、平井先生のホームページ<http://www.inclusive-d.com/index.html>もご覧ください。）

このインクルーシブ・デザインの考え方の根本は、大学博物館の展示方法や建物での「物理的なデザイン」のみならず、「大学博物館というシステムのデザイン」にとっても重要であると、私は考えるようになりました。九大博物館では、大学という場所でほとんど除外されている対象—例えば子供など—に向けた展示や企画にも取り組みますし、学芸員（博物館の専門職）の資格取得のための教育にも携わっているからです。特に学芸員教育の点からすれば、大学博物館という高等教育の場で包含性が実現されていることは、より包含性が求められる社会教育機関で働く人材の育成にとって、本来、必須のものであるといえます。

私たちがP&P研究で取り組んでいるインクルーシブ・デザイン・ワークショップでは、「除外されてきた人々を包含」することを実践しつつ、「利用者による展示評価」「教育効果」などを調査しています。その過程で、研究としての興味とともに、個人的に有意義な発見が多々あります。例えば、大学や研究機関は多くのことが意識的あるいは無意識的に除外されているのが「普通」であるような環境で、私自身は、そのような環境に

すっかり慣れてしまっています。ワークショップをとおして、そのような環境に慣れていることで、包含に対する「心理的な障壁」を、自分の中に作っているのかもしれないと、気づかされました。

今回は、「エクストリーム・ユーザー」の皆さんとのワークショップの実際について、ご紹介します。

(総合研究博物館 植物系統学)



ワークショップ前の様子

研究紹介:労働寄生性ハナバチ、 キマダラハナバチ属の分類研究

三田井克志

九州大学農学部昆虫学教室は、1921年に農学科昆虫学教室として創立されて以来、日本の昆虫学の中核的な研究施設として、多数の業績と研究者を輩出してきました。教室の教授には1930年から江崎悌三が初代を務めたのち、安松京三、平嶋義宏、森本桂、湯川淳一、多田内修が歴代してきました。このうち、安松、平嶋、多田内の3教授は膜翅目(ハチ目)、特に平嶋、多田内はハナバチ類の分類を専門にしており、日本のハナバチ相の解明に多大な貢献をしました。

ハナバチ類はハチ目ハナバチ上科に属し、スズメバチ類、アリ類とともに、野外でごくふつうに見られるハチの仲間です。もっとも身近な種類はミツバチやマルハナバチ類なので、ハナバチ類は社会性昆虫というイメージでとらわれがちですが、大多数の種は単独で生活しています。ハナバチ類の幼虫は母親が貯蔵する花粉・花蜜に依存している点で、肉食性のスズメバチ類やアナバチ類とは異なります。

昆虫学教室には多大なハチ目の標本が所蔵されています。これは私の研究にはとても幸いなことでした。私はミツバチ科のキマダラハナバチ属の分類研究をしています。このハチはハナバチ類の一員ですが、自分では巣を作らず、幼虫のために花粉や花蜜を集めることもしません。その代わりに、ほかのハナバチの巣に侵入し、こっそり自分の卵を産み付けます。孵化した幼虫は巣の持ち主が集めた花粉・花蜜を横取りして成長します。このような習性は、宿主の体や卵よりも労働の成果を主要なターゲットとしているため、労働寄生と呼ばれて

います。労働寄生ハナバチ類は花粉を集める必要から開放されているため、一般のハナバチ類が備えている花粉収集のための特殊な毛を欠き、黄色、赤褐色、黒などの目立つ色彩を持っている種が多く、一見するとアシナガバチ類やアナバチ類に外観を持っています。この色彩は擬態の意味があるのではないかと考えています。キマダラハナバチ属(*Nomada*)は労働



昆虫学教室の標本室



キマダラハナバチの一種

寄生性ハナバチ類の世界最大のグループで、世界に約800種がいます。しかし、その分類研究はまだ不十分で、同定も困難なため、せっかく興味深い習性を持っているのに、生態的研究が進んでいません。

私がこのグループの分類研究で調べた標本は、昆虫学教室と私が採集したものを合わせて約5,000点。さらに日本各地の研究機関、昆虫研究者から借用した標本を合わせると日本産のものだけで10,000点を超える数になりました。これらの標本から九州産と北海道産の標本を抽出し、顕微鏡で外部形態を調べます。調べる際には、原記載に記してある重要な特徴を念入りに調べます。九州と北海道の標本を先に調べたのは、もっとも離れた個体群間を比較するほうが、日本国内で亜種分化や、地理的な変異を(もし存在すれば)発見しやすいからです。なんらかの違いが見られたら、その中間、つまり本州産の標本類を見て、その違いが連続的かどうか確認します。私のこれまでの研究では不連続的な顕著な違いは見出

されませんでした。

されませんでした。

ラベルに記してあるデータはパソコンで整理します。標本のデータは、原記載論文のデータ、その後に報告された文献記録のデータ、標本検視に基づく私のメモと一緒に、市販のデータベースソフトで一括管理・整理しました。

その結果、数種の新種を見出したものの、それまで76種あった日本産種は51種に減少してしまいました。減少した理由は雌雄がそれぞれ別種として記載されたり、些細な個体変異に過ぎない個体が独立種として扱われていたことなどが判明し、シノニム(同物異名)と認定した種が多数あったからです。このような分類学的な修正は、外部形態の類似性だけでなく、ラベルデータから整理した分布範囲や採集時期が傍証となっています。これは多数の標本データの集約があつてできることです。

昨今の「ムシキング」や安価な外国産昆虫の売買の影響で、昆虫標本と聞くと珍奇な形状やぴかぴかの光沢を持った美麗昆虫を思い浮かべる方も増えたのではないのでしょうか。一方で、埃にまみれた収蔵庫の片隅に放置されたかび臭い標本箱を連想する人もまだまだ多いことでしょう。きちんと作成された標本は汲めども尽きない情報を有する媒体であつて、それを有効活用して自然界に関する情報を引き出すのは人間のスキルにかかっています。(文中、敬称略。)

(総合研究博物館 専門研究員 昆虫学)

研究紹介: 絵葉書の研究

浦川 和也

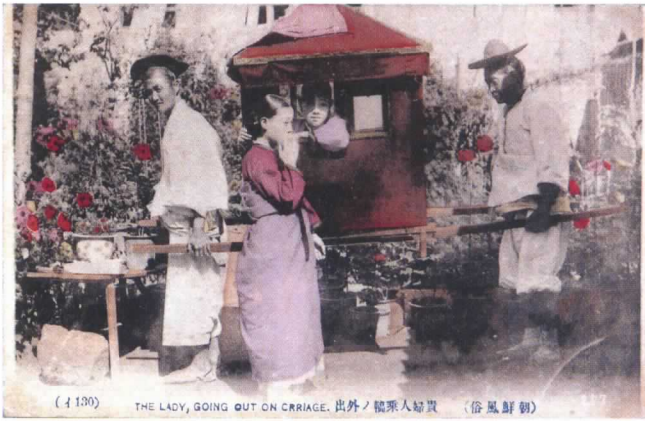
昨年9月に、九州大学総合研究博物館で「専門研究員」の制度が始まり、その第1号として名護屋城博物館学芸員の安永浩とともに受け入れていただきました。私自身、九大文学部史学科の卒業で、こういった形で研究員として受け入れていただき、本当に嬉しく思っています。

私が勤務している名護屋城博物館は、豊臣秀吉による朝鮮侵略「文禄・慶長の役」の出兵基地となった名護屋城跡に隣接して平成5年10月に開館し、現在16年目で開館以来のべ約187万人の方々に来館していただきました。メインテーマ「日本列島と朝鮮半島との交流史」の展示、特別史跡名護屋城跡並びに陣跡の保存整備、日韓の友好・交流の推進と日韓交流支援を三本柱として活動しています。私は、特に近世・近現代の担当として、資料の収集・保管、調査研究、展示・公開に当たっています。日韓交流史、特に近現代史は、日韓の歴史認識が政治・外交の問題まで発展しかねないこともあり、展示や文章表現にあたっては十分な検討が必要です。一般の方々はさまざまな歴史観をお持ちですが、私たちとしては、日本中心の歴史観にも、韓国・中国中心の歴史観にも偏るこ

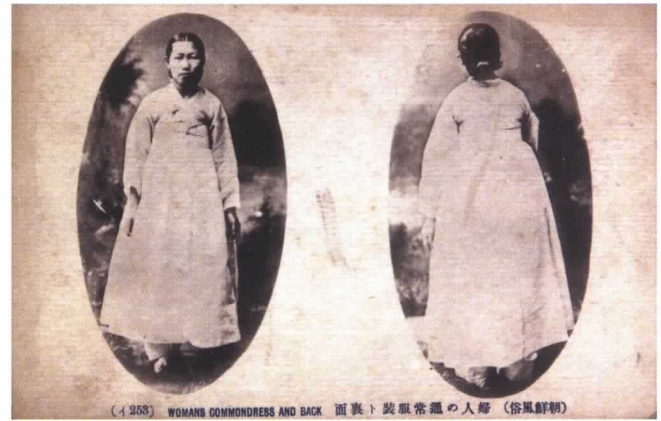
となく、ありのままの事実を伝えていくことをめざしています。

さて、今回、九大総合研究博物館の専門研究員としての1年間の研究テーマを、〈1朝鮮半島絵葉書の分類・検証〉〈2絵地図の詳細調査・研究〉〈3文禄・慶長の役の被擄人の個別研究〉の3点としました。特に〈1〉の絵葉書の研究を中心に進めていきたいと考えています。

私が研究対象としているのは、日本人が1900~45年の間に発行した絵葉書ですが、日本の絵葉書は、1900年の郵便法制定の際に私製葉書の印刷・発行が正式に許可されて以来、本格的に発行されるようになりました。当時は、新聞にも写真がほとんど掲載されず、錦絵版画が政治・外交・事件・戦争などの様子を絵として伝える状況でしたから、特に1904年の日露戦争勃発と同時に、写真でその状況を伝える絵葉書は爆発的に発行数が増え、いっせいに「絵葉書ブーム」が到来しました。現在の絵はがきとは違って、当時の絵葉書は実に多種多様で、ニュース絵葉書(震災・災害・号外等)、記念絵葉書、名所絵葉書、風俗絵葉書、広告絵葉書、プロパガンダ絵葉書(天皇・皇族・戦時スローガン等)、「美人」絵葉書(女性・子ども



手彩色の絵葉書「(朝鮮風俗)貴婦人乗轎ノ外出(イ130)」



絵葉書「(朝鮮風俗)婦人の通常服装ト裏面(イ253)」

も・スード)、ミュージアムカード、先覚者・著名人等の絵葉書などさまざまなものが発行されました。このような状況ですから、本来の「はがき」として使われたものは5%程度で、ほとんどは未使用のまま残っています。つまり、当時の絵葉書の第1の意味は、画像を大量に不特定多数の人々にいっしょに伝えることができるマスメディアだったのです。1900~20年代は、最も中心的な画像媒体だったとも言えます。

私自身は、15年ほど前から業務・研究の一環として絵葉書の収集・整理・調査研究を進めており、日本人が発行した日本(アイヌ民族・沖縄人を含む)、韓国・朝鮮、満洲、中国、台湾、南洋諸島などの絵葉書をもとに、昨年、「近代日本人の東アジア・南洋諸島への「まなざし」—絵葉書の史的価値と「異文化」表象—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第140集)で、風俗絵葉書に伏在する近代日本人の東アジアの諸民族に対する意識を検証しました。写真で御紹介している絵葉書の1つには、韓服を着ている女性の正面と背面を1枚の葉書に印刷しています。日本で絵葉書が本格的に発行されるようになった20世紀初頭は、第5回内国勸業博覧会の場外施設「学術人類館」(1903年)や明治記念拓殖博覧会(1912~13年)などで、「人間の展示」が行われた時代でもありました。帝国主義を学問的に裏打ちした「人類学」の手法が、この絵葉書の中でも見てとれます。

名護屋城博物館には約3,500点の絵葉書があり、そのうち朝鮮半島絵葉書が2,900点余りを占めています。朝鮮半島絵葉書のコレクションでは、国内最大規模になるかと思います。

これまでは、絵葉書1点1点について、整理番号、タイトル、英題の有無、印刷方法、色彩、縦横、写真カット数、印刷所(版元)、発行者、推定発行年代、書式年代、摘要(定形外葉書の形態や使用時の発信者・受信者・日付・消印・切手・スタンプ等)、地域、種別などの項目で目録をとり、整理を進めてきましたが、今回は、種別・地域などを軸に分類し、発行年代順に整理して、その編年的な特徴を見いだすとともに、出版社と共同して資料集を印刷・出版し、絵葉書研究・朝鮮半島研究の基本資料としようと計画しています。

これが一段落すれば、まだあまり手をつけていなかった地元佐賀県の絵葉書を網羅的に調査していきたいとも考えています。

ところで、このような絵葉書の研究とは別に、今回、せっかく専門研究員として受け入れてもらったのですから、九大総合研究博物館と名護屋城博物館の連携を少しでも強化できればとも考えています。現在、受入教官の宮崎先生と協議して、両館の連携事業として、九大の学生が企画する展覧会を名護屋城博物館で開催しようという計画も進めています。学生時代に九大で歴史学の基礎を学ばせていただいたこともあり(「社会勉強」もたくさんさせていただきましたが)、学生の教育活動の充実にも少しでもお手伝いできればと考えています。新年度になれば本格的に動き出すかと思いますが、今年も楽しみな1年になりそうです。よろしくお願いします。

(総合研究博物館 専門研究員・佐賀県立名護屋城博物館 学芸員 日本近代史)

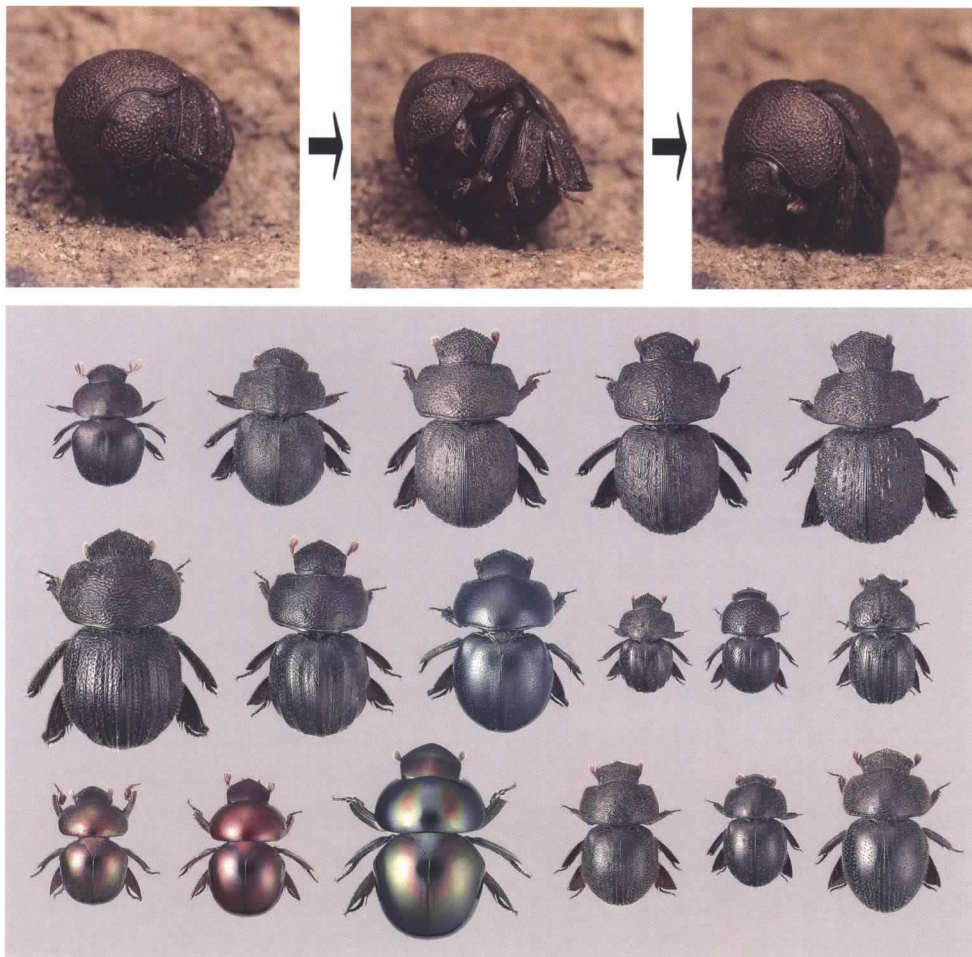
まんまるこがねの話

丸山宗利

マンマルコガネを知っていますか? きっと知らない人が多いでしょう。その名の通り、驚くと球形に丸まるコガネムシの仲間です。詳しくいえば、コウチュウ目コガネムシ上科アツバコガネ科マンマルコガネ亜科に属します。日本にも1種が九州南部から南西諸島に分布しますが、目立たない姿のため、発

見されたのは1990年と比較的最近のことです。大きさは種によってちがいますが、だいたい3ミリから8ミリ程度の小さな甲虫です。

2007年の5月ごろ、わたしはマレーシアの熱帯雨林に調査にでかけました。ゴンバツ溪谷という森のなかにあるロッジに



丸まった状態から元に戻るマンマルコガネ(上)とゴンバッツ渓谷で採集されたマンマルコガネの標本(下)。

1ヶ月間泊まり込み、ヒメサスライアリという軍隊アリと共生する昆虫を調査しました。昼間は蒸し風呂のような森のなかをひたすらに歩きまわり、目的のヒメサスライアリを探します。そして体中をアリに刺され(ヒメサスライアリのみならず、熱帯のアリの多くはハチのように刺します)、ヒルに食われ、ダニにとりつかれ、ほうほうのていで夕方ロッジに戻る生活を繰り返していました。ほっと一息つく夜、そんなわたしにひとつの楽しみがありました。それはマンマルコガネの採集です。

マンマルコガネはシロアリの巣に住んでいます。わたしは毎日森を歩いていて、また同行者の協力もあり、いくつかの大きなシロアリの巣を見つけました。それは立ち枯れた木で、まわりが泥状のもの(シロアリの食べかすや糞)で固められていました。その泥状の覆いのなかにマンマルコガネが住むことがわかりました。幼虫はそれを食べて成長するようです。さらに、昼間ならまったく気づくことのない虫ですが、夜になると巣の表面へ這い出し、歩きまわったり、交尾したりすることもわかりました。

わたしはこれを「ご神木」と呼び、そこに毎晩、梯子を背負って通いました。懐中電灯で立ち枯れの表面を照らすと、点々とマンマルコガネが張り付いています。驚かすと丸まってコロリと落ちてしまうので、そっと採集します。見たところ明らかに複数の種が含まれています。採集そのものも楽しいのですが、今日は昨日と違う種が採れたとわかると、とてもうれしいもので、

それが疲れた体をおして夜の森へ入る活力となりました。

さて、そうやって得られたマンマルコガネを研究室に持ち帰り、標本にしてじっくり観察したところ、なんと11もの種が含まれていることがわかりました。また昼間に別の環境で採集したものを含めると、14種が採集されていました。ごく狭い範囲の森でそれだけの種数が見つかったことは単純に驚きであり、熱帯の生き物の多様性の大きさを改めて学ばされました。また、今回は500頭以上の標本が得られましたが、これだけのまとまった標本は日本にはほとんどなく、わたしはたった1回の調査で日本屈指のマンマルコガネのコレクションを手に入れることになったのでした。

ところで、マンマルコガネは何のために丸まるのでしょうか。その理由をよくわかっていませんが、わたしは毎晩の観察であることに気づきました。アリの行列がシロアリの巣に侵入し、シロアリやその巣の周辺にいる小さな昆虫を狩っていくのです。シロアリは木材を食べるので他の虫を襲うことはありませんが、一部のアリはシロアリを中心とした他の昆虫を専門的に食べます。つまり、マンマルコガネが丸まるのは、シロアリを食べにくるアリに対する防御ではないかと想像しました。これをはっきり言うためには実験が必要ですが、念入りの野外採集は、標本そのものだけでなく、いろいろな考えももたらしてくれます。

(総合研究博物館 昆虫学)

前回の連載(5)から2回飛んでしまったことを最初にお詫び申し上げる。

歴博年代論が発表されて以来、学識も見識も十分な多くの研究者たちが、弥生時代の開始年代を500年近く上昇させる歴博年代論をいとも簡単に受け容れてしまった理由は何であろうか。甕棺という土器から実年代の手掛かりが多い中国鏡などの遺物が出土し、日常的に弥生時代の実年代について考えざるをえない北部九州以外の場所では、弥生時代実年代について真剣に考える必要がなく、相対年代の世界で話が済んでしまうという事情があるうえに、考古学者にとって、自分が関係した遺跡や研究対象の年代が古く遡るのを、望ましいこととしてほとんど無批判に受け容れてしまう土壤があるのだ。私が中学生の頃、「大きいことは良い事だ!」というチョコレート の 宣 伝 文 句 と 歌 (山本直純作曲)があったが(歳がばれませぬ)、「古いことは良い事だ!」「早いことは良い事だ!」なのである。このことをもう少し広い視点から考えてみよう。

考古学関係の新聞記事の見出しは、ほとんどが「最古」「最古級」「最大」(最小もあった)であって、「最」の字が付かないネタは新聞記者が取り上げない。サイコ・サイコの連呼だが、ヒッコクの映画ではない。古く遡れば記事になるが、「遡らない」と言うような保守反動・頑迷固陋の連中を、進歩的新闻社は相手にしない。取り上げる価値が無いのである。学説もいままでの説を否定する「新説」がよろしい。仮説は検証されなければどこまで行っても仮説に留まるが、従来言われてきたことと違うことを言えば、未検証であっても「新説」として新聞ネタにはなるのである。

一部の外国では考古学が国威発揚に露骨に利用されており、地位の高い研究者が積極的にナショナリズムに奉仕している場合がある。いっぽう日本の考古学者が国威の発揚や国粹意識の形成に無縁だったかという、そうではなく、いつのまにか雁字搦めに絡め取られてしまっていた。日本の歴史学の様々な分野のうちで、いまや、考古学がもつとも、それらの形成と強化に貢献しているだろう。しかも、他の国のように国家からの強制や社会からの明瞭な圧力無しに、むしろソフトに且つ自発的にやっている節があるからやっかいだ。さらに、若い人ほどその傾向が強いというのは末期的症状と診断されても仕方がなかろう。

掘れば掘るほど古くなる「前期旧石器」、これは2000年に無残にも崩壊したが、「世界最古の縄文土器」、採集狩猟民が高度に形成した「縄文文明」、「世界に冠たる巨大古墳」、といった具合で枚挙に暇がない。日本の特殊性と先進性を強調する論調が跋扈する。そうした論調は、現象の説明をする概念装置の中身が、たとえば「階層社会」・「国家」・「都市」や「分業」といった概念が日本の、さらには考古学界にしか通用

しなくてもかまわない、他の学問分野の概念と無関係に独自に定義すればよい、という風潮とも無関係ではない。そうしないと日本の特殊性や先進性を主張できなくなるからだ。

第二次大戦後にライシャワーらの近代化論が登場し反動イデオロギーとして問題となった。開発独裁であっても近代化を目指すものは「是」「必要悪」であり、政治体制の相違もやがては近代化に向かって収斂し解消してしまい、体制の差など意味がなくなるというライシャワーの予言通りにその後の世界が動いてしまったから余計に厄介なのだが、いち早く国家や都市を形成し未開な段階から脱することが先進的で良いことという暗黙の了解の元に、文明化の早さを国どうしあるいは地域間で競うようになった現状は、先史～古代に対する「近代化論」の主張といえよう。文明化・「近代化」は是であり、早ければ早いほど良いのである。いまや縄文時代に階層化が進んで首長がいるらしいから、そのうち国家ができるだろう。東アジア「最古」の国家が!!

国家レベルでなくても、ローカリズムlocalismへの貢献が考古学者に求められている。その地域が他地域より少しでも先進的だったと言うことに躍起になる。「最大」とか「最古」が出土すれば喜ばれる。他地方に先駆けて原人が出現したり、土器が登場したり、農耕が始まったり、古墳や寺院や国の役所ができたり……。都市や地域国家を形成した早さを競う。これがお国自慢、地域おこし、村おこしと結び付いて、自分の所の遺跡を卓越したものとして宣伝するのに熱心になる反面、他地域の遺跡の評価では概して冷淡という構えを生み出す。もちろん郷土愛や文化財保護を支える意識を否定するものではないが、地域の歴史、日本の歴史の学問的評価に、冷静な議論が今ほど必要な時はなかろう。

今回を以って本連載は終了します。

(総合研究博物館 考古学)

平成20年度九州大学総合研究博物館公開講演会の報告 植物の世界～お花畑から遺伝子まで～

三島美佐子

今回は、フィールドワークをばりばりとこなす3人の演者をお招きしました。最初は、被写体に惚れ込み植物研究にのめり込んでしまったいがりまさしさんによる、ウラジオストックと九州をつなぐ生物地理研究。プロならではの美しい撮影画像の数々には、ため息がでるばかりでした。次に、趣味の動画が研究にまで高じてしまった(?)川窪伸光先生による、訪花昆虫の飛行軌跡に関する最新研究。息をのむ動画に、皆釘付けになりました。休憩をはさんで、ナチュラルリストにして進化発生学研究者、塚谷裕一先生による、植物の葉の形の遺伝子研究。「葉っぱの裏が表?!」の最先端に、驚きの連続でした。講演後のお楽しみスライドショーは、「とっておきの画像3枚」という条件で、先生方に持ち寄っていただきました。演者の先生方に加え、九大の和田先生、比良松先生にも、とっておき画像をご披露いただきました。各先生方にこの場をかりて、感謝いたします。また、ご参加いただいた皆様、どうもありがとうございました。今後の公開講演会についても、御要望などを是非お寄せ下さい。そして、遠くから来てくれたり、一所懸命聞いてくれていた、小学生のきみたち、どうもありがとうございました!ぜひまた遊びにきてください。

開催日/2008年11月29日(土)
場所/九州大学箱崎キャンパス50周年記念講堂4F
大会議室



活動状況(展示・講演会関係)

公開講演会

平成20年11月29日

平成20年度九州大学総合研究博物館公開講演会
植物の世界～お花畑から遺伝子まで～(上記囲み記事参照)

サテライト展示

●福岡空港 第1ターミナル2階待合室

平成20年9月29日～平成21年2月4日

化石のヒミツIII

平成21年2月5日～

化石のヒミツIV

●福岡市保健環境研究所「まもる一む」

平成19年6月19日～平成21年1月20日

植物をもっと知ろうIII

平成21年2月5日～

植物をもっと知ろうIV

●志摩町総合保健福祉センター「ふれあい」

平成20年11月2日～平成21年1月3日

対馬ガヤノキ遺跡

平成21年1月4日～

対馬塔の首遺跡

●二丈町健康ふれあい施設「二丈温泉きららの湯」

平成20年11月2日～平成21年1月3日

末盧国宇木波田遺跡

平成21年1月4日～

伊都国三雲遺跡

●前原市伊都文化会館

平成20年11月2日～平成21年1月3日

行橋市琵琶隈古墳

平成21年1月4日～

飯塚市山ノ神古墳

活動状況(その他)

新規寄贈標本資料

平成20年12月5日

東京大学大学院理学系研究科附属植物園 邑田仁園長より
日本産イラクサ科ヤブマオ属標本ほか植物さく葉標本約4000点

平成21年1月25日

久留米大学医学部生物学教室 河内俊英氏より
昆虫用標本筆筒3棟

平成21年2月2日

高等教育開発研究センター 松本顕助教より
理科教育用に作成された生物標本 液浸瓶40本、頭蓋骨1点

平成21年2月2日

言語文化研究院 高橋 勲准教授より ホンドテン剥製標本1点

運営委員会

平成20年12月2日(書面回議)

お礼

昨年末実施しました「九州大学総合研究博物館の今後と、大学博物館による学習支援・研究活動にかんするアンケート」につきまして、回答にご協力くださった皆様方には厚くお礼申し上げます。

結果につきましては次号にご報告の予定です。

九州大学総合研究博物館ニュース

The Kyushu University Museum News

No.12, March 2009

発行:九州大学総合研究博物館 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

TEL & FAX 092-642-4252 ホームページ <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp>

印刷:城島印刷株式会社 〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6 TEL092-531-7102 FAX092-524-4411